

---

# 熱砂の国へ

水瀬準一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

熱砂の国へ

### 【Nコード】

N3947L

### 【作者名】

水瀬準一郎

### 【あらすじ】

まだ神が身近にいたころの日本で、日照りによりある小さな集落が無くなるうとしていた。

村人達は生き残るため『お沼さま』と呼ばれる神に贄を捧げる。

贄の少女は世界を超え、少年と出会った。

いわゆる異世界トリップものです。

## 日照り（前書き）

はじめての小説です。

文章を書くのに慣れていませんので、生温かい目で見ていてくださ  
い。

## 日照り

太陽が、ぎらぎらと照り付けていた。

そこは山間の小さな平野で、平野の中央には二十数軒程の木造の平屋が集落を形作っている。

集落の周囲には畝に仕切られた畑が広がっていたが、畑には作物らしきものは見当たらず、ひび割れて赤茶けた土に萎びた草が疎らにはえていた。

平野を取り囲む山々でさえ、立ち枯れている木が点在し、動物の姿もなく、この平野全体が乾ききっていた。

集落の家には人はおらず、集落の中央の空き地に7、80人程の人が集まっていた。

中央に集まった年齢はバラバラで、やっと杖に寄り掛かって立っている老人から、若い女性に抱かれた乳飲み子もいる。

皆粗末な布を体に巻き付け、腰の辺りを縄で縛るといふ姿は共通しており、身体が酷く痩せ、疲れた表情をしているところも似通っていた。

人々は、空き地にある木製の祭壇の様なものを取り囲むと、両膝を地面につけ、顔の前で両手を合わせて、天に向かって一心に祈っていた。

祈りを捧げる人々の顔を容赦なく太陽が照らし、少しでも水分をしばらくとろうとするかのようだった。

何人かは祈りの途中で倒れてしまっていたが、周りにも助ける余力のある者がいないため、倒れたままの状態にいるしかなかった。

太陽がちょうど真上にきたとき、祭壇の一番近くで祈っていた老人が立ち上がると、周りの人々を見渡し、しゃがれた声で話し始めた。

「最後に雨が降ってからすでに三月が過ぎた……。一月目に村の井戸が枯れ、二月目に近くの川が枯れ、三月目の昨日はついに山の水源が枯れた。このまま雨が降らなければ、皆死ぬしかない。」

そこで老人は空を見上げたが、空には雲ひとつなく、太陽だけが輝いていた。

「雨乞いの祈りも今日で十日目……。空に雲一つ戻ってきてはいない。アマツカミにわれわれの祈りが届いてはいないということだろう。」

老人の言葉に、空き地をおおっている空気はより重苦しくなったが、老人はある決意をこめ、さらに話しを続けた。

「だが、このまま皆が乾き死ぬのを待つことはできない。お沼さまに頼るしかない。」

『お沼さま』という言葉に空き地の空気は一瞬凍りついた後、ざわめき始めた。

「生贄さまじゃ」

「祟り神……」

「村長！あの人食いに子供を喰わせるのか……！」

「だまらんかつつ……！」

老人からの激しい叱責に、一瞬で人々は静かになる。

「お前達が嫌がるのもよく分かる。だが、もうこれしか手がないのだ。心配せんでも、贅にはわしの一番下の孫をあてる。」

老人の言葉に、空き地から声を上げるものは誰もいなかった。

日照り（後書き）

主人公はまだ出てきません。

お沼さま(前書き)

待っている人がいるかわかりませんが、続きです。



## お沼さま

『お沼さま』

それは、遙か昔から村の水源近くの沼に棲みついている神と呼ばれる存在だった。

だが、神の中でも祟り神と呼ばれるものであり、沼の周りには常に瘴気がたちこめているため、人間や地を這う獣はおるか、空を飛ぶ鳥でさえ近づかない場所である。

100年以上前、この辺りを一つの大きな国が治めていたときには、重罪人の処刑方法でもっとも重いものとして、お沼さまの棲む沼へ落とされるといふものがあり、落とされた者は生きながらにしてお沼さまから引き裂かれて喰われたのである。

その国も現在では滅び、この小さな集落ではけして近づいてはならない禁足地として、まず子供に教えられる場所となった。

ただ、このお沼さまには別名があり、それが「生贄さま」だった。

これは、まだこの集落ができたばかりの頃、村の子供たちが数人山の中で迷い、その中の一人が他の子供たちの目の前でお沼さまの沼へ落ちてしまったことがあった。

もちろん、子供はすぐに沼から出てきたお沼さまに飲み込まれ、村に戻ることはなかった。

子供の両親は嘆き悲しみ、集落の者たちはお沼さまの沼へ続く獣道にこれ以上迷い込むものがないように、厳重な柵を設けることになった。

ところが、不思議なことに、子供がお沼さまに飲み込まれた年は、雨の少ないこの地域には珍しく雨に困ることがなく、数十年に一度といわれる大豊作となったのである。

そのため、誰が言い出したのかはわからないが、お沼さまに子供を、

それも7歳にならない子供を贄に捧げると、その年は雨に困らないと言われるようになったのである。

だが、集落の人も「雨が降るかもしれない。」というだけでは集落の子供を捧げるようなことはできなかつたことから、過去には何度か行われていた生贄も、ここ何十年かは行われることはなかつたのである。

しかし、今年の日照りはあまりにひどく、このままでは集落が滅んでしまうことは、誰の目にも明らかなかたであつた。

集落の人々は誰もが一度はお沼さまへの生贄を考えていたが、自分が言い出したことで、大事な子や孫を生贄に差し出さなくてはならなくなることを恐れて、皆自分からは言い出せなかつたのである。

お沼さまへの生贄を決定した村長である老人もその一人であつた。孫の中で7歳に達していないのは次男の一人娘である『りん』しかおらず、母親が亡くなってからは、特に老人になつて、いつも老人の後をついて回るような子だつたため、老人にとつても可愛がつていた孫だつた。

それでも、村長としてこのまま集落が滅びていくことを止めないわけにはいかず、りんをお沼さまへ捧げることを決めたのである。

すでに、集落に残された水はほとんどなくなつており、お沼さまへの生贄の儀式を長引かせても仕方がないことから、儀式は次の日の正午に行われることになつた。

## お沼さま（後書き）

次は主人公視点の予定です。

## 薬草摘み（前書き）

やっと主人公ができました。

6歳児にしては思考がしっかりしていますが、昔の子は今よりも内面の成長が早かったそうですから、そう考えてください。

## 薬草摘み

あつい・・・

みず、のみたいな・・・

あさのぶんはのんじゃったから、よるまではがまんだ。

りんは絶え間なく流れてくる汗をぬぐい、喉の渴きをこらえると、必死で草むらの中を歩いた。

その日、りんは祖父から頼まれ、シップとなる薬草を摘むために一人で村はずれの川まで来ていた。

その薬草は川岸近くの草むらに生えていることが多く、腰痛を患っている祖父のため、りんは何度も摘みに来ている通いなれた場所だった。

りんは今年の正月に6歳になったが、普通の子よりも小柄で、それほど茂っていない草むらにも埋まってしまう、草をかきわけるのも大仕事だった。

だが、いつもは流れている川もこの日照りで枯れ、川岸の草もほとんどしなびているため、りんが朝早くから探しても、正午ちかくのいままで薬草を見つけることはできなかつたのである。

爺さまやお父は、カミサマにおいのりしてるころかな。

りんもはやくみつけて、かみさまにあめをふらせてっぺおいのりしなきゃ。

りんは暑さで頭をボーっとさせながら、草むらの中を歩き、

「あっ！」

ドシャッ

太い草の根に気づかず、顔から地面に倒れてしまった。

おでこがジンジンと痛くなり、りんは顔を泣く寸前までくしゃつとしたが、歯を食いしばって痛みを我慢して、りんは立ち上がった。

ないちゃだめ、てんごくのお母<sup>かあ</sup>もみてる。もつとがんばらなくちや。

りんは去年の夏に亡くなった、病弱でずっと寝たきりだった母親の顔を思い出し、また涙がこぼれそうになったが、涙をこらえて歩き出した。

母親は、死ぬ間際まで泣き虫のりんを心配し、『りんのことずっと見てるからね。』とりに約束して息を引き取った。

それから、りんは母親に心配をさせないように、涙を我慢するようになったのである。

はやく爺さまのやくそうを見つけないと。爺さまはきのうもこしがいたそうだった。

母親が亡くなってから、りんにはあまりかまってくれない父親にかわって、その後りんの面倒をみてくれたのは村長である祖父だった。忙しい仕事の合間に、りんの「今日は何を見て、何をした。」という、要領をえない話を黙った聞いてくれたり、山菜取りや魚釣りに連れて行ってくれた。

祖父は自分にも他の者にも厳しく、間違っていることや危ないことをすると大声で叱ったが、りんが一人で泣いていると黙って頭をなでってくれる祖父がりんは好きだった。

その祖父のために、りんはどうしても薬草を見つければならなかったのである。

りんは暑さでふらふらしながらさらに川上の方へ歩いていくと、それから一時間ほどしてやっと木の陰に目当ての薬草を見つけた。

- やつとみつけた。

りんは安堵すると必要な分だけ摘み取り、次に探しにきたときにすぐわかるように場所を覚えたと、集落に向かって歩き出した。

薬草摘み（後書き）

りんはおじいちゃん子といっせいです。



## 生贄（前書き）

りんの祖父は、村長として決断しましたが、だからといって情がなくなるわけではないのです。

## 生贄

日も沈みかけた頃に、りんは集落へたどり着いた。

りんは暑さと長時間草むらを歩いたことで疲れはてていたが、夜になる前に集落にたどり着いたことに安心していた。

だが、りんは集落に入ったところで、いつもと集落の人々の様子が違っていることに気がついた。

りんが「ただいま。」と声をかけても、皆はりんから目をそらして小さく「おかえり。」と言うとすぐにりんから離れていくのである。特に、いつもりんと遊んでいる同じ年のウメや一蔵の親たちは、りんを見るなりすぐに家に引っ込んでしまった。

それに、この時間であれば家の外にいるはずの子供が誰も外に出ていないのも変だった。

集落の普段とは違う様子に、りんはだんだんと不安を感じ始めたが、りにわかるように説明してくれる者は誰もいなかった。

- なんかへん。ウメちゃんや一蔵はどこだろう。

- そうだ、爺さまならムラオサだからなんとかしてくれる。

りんは大好きな祖父のことを思いだすと、祖父なら集落の人が変なことでもどうにかしてくれるだろうと思い、できるだけ急いで自分の家へ向かった。

りんの家は集落でも一番の高台にあり、そこそこ大きな平屋だったが、祖父と父のほかに、父の兄夫婦とその子供二人が住んでいるため、余裕があるとはとてもいえなかった。

りんにとっての叔父家族は、寡黙な祖父とりんの父親に比べると明るくよくしゃべる人たちだったので、いつもであれば家の前までく

れば話し声が聞こえるはずなのに、この日にかぎって何の音もしない。

- やっぱりへん。だれもないの？

りんはますます不安になり、急いで家の中に駆け込んだ。

すると、囲炉裏をかこんで家族が全員座っているのを見たが、その顔は暗く、叔母やその子供たちにいたっては涙を流していた。

りんは、前にも同じ光景を見たことがあった。

- 爺さまたちもへんだ。まるでお母がしんだときみたい。

りんは、何だか胸を締め付けられるような感じがして、胸の辺りの着物をギュツと掴むと、おそろおそろ「ただいま」と声をかけた。

その声に全員ハツと顔を上げた。

その中で叔母だけが立ち上がってりんを駆け寄ると、りんをしっかりと抱き締め、祖父を見ながら声を張り上げた。

「お舅さま、やっぱりりんを差し上げるのはやめましょう。まだこんなに小さいのです。」

叔母の腕の中でりんは何を言われているのかよくわからなかったが、自分がどこかに行かされるということだけは理解でき、無意識に叔母の身体にしがみついた。

りんが叔母の腕の中から祖父のほうを見ると、祖父は静かに立ち上がって、叔母の腕から優しくりんを抱き上げた。

「りん、今から大事な話をするからしっかりと聞いてほしい。お前にお沼さまのところに行ってほしいのだ。」

『お沼さまのところに行ってほしい』 - その言葉に、りんの頭は真っ白になった。

りんはいつのまにか自分の身体がガクガクと震えだしていることに気づいたがとめることはできなかった。

りんはようやく集落の人や祖父たちが変だった理由がわかったのだった。

『お沼さま』の言い伝えは、子供に一番最初に教えられるものだったから、りんももちろん母親から話を聞かせられていた。

日照りのとき、子供をお沼さまに捧げて雨を降らせるのはお話の中だけだと思っていたから、りんは自分が捧げられる子供になるとは考えていなかったのである。

りんの頭の中には『お沼さまに食べられる』ということだけがぐるぐると回っていた。

「じ、爺さま。りん、わるい子だからオヌママサマにたべられちゃうの?」

りんの言葉に、祖父はひどく悲しそうに目を細めた。

「そうじゃない。りんはとても良い子だ。」

「だが、どうしても誰かがお沼さまのところに行つて雨を降らせてもらわないといけない。日照りで、この村は死にかけている。このままでは皆死んでしまうのだ。」

「わしは村長としてそれを止めなくてはならん。わしの身内の中で生贄の資格があるのはりんだけなのだ。」

「わしは酷い爺さまじゃ。良い子のりんにこんなにもごいことしか言えないのだから。わしは地獄行きじゃ。りん、わしを恨むなら恨んでくれ・・・」

祖父はそう言うとりんをしっかりと抱き締めた。

祖父の顔はひどくこわばっており、目も真っ赤で、りんを抱いた腕はりと同じように震えていた。

りんが祖父の腕から周りを見ると、父や叔父の目は真っ赤で、叔母やいとこたちもまた泣き始めていた。

りんは、集落の人たちの顔も思い出し、最後に亡くなった母親を思い出した。

「りんがオヌマサマのところに行かなかったら、みんなしんじょうんだ。」

「こわい、こわい、こわい。お母。たべられちゃうのはこわいよ。」

「でも、お母みたいにみんながしんじょうのはもっこわい。そっちのほうがりんはいやだ。」

「じ、爺さま。りん、いくよ。オ、オヌマサマのところに行ってくる。」

りんの顔は真っ青で、体の震えも止まっていなかったが、なんとかそれだけを祖父に言っていると、やっぱり我慢できなくなってぼろぼろと涙を流しはじめた。

祖父はりんの言葉を聞き、さらにりんを強く抱き締めると、何度もりに「すまん。」と謝り、顔をしかめるようにして泣いたのだった。

その夜、叔母が精一杯豪華な夕飯をつくり、それを食べた後は、祖父や父、叔父、叔母、いとこたちが恐怖で眠れないりんをかわるがわる抱き締めて、一晩を過ごしたのであった。

## 生賢（後書き）

子供の考えはシンプルで、いろいろな考えてしまう大人よりも強く純粋だと思います。

## 儀式（前書き）

家族の中にも葛藤があります。

## 儀式

夜が明けると、叔母は自分の飲み水で布を濡らしりんの身体の汚れをぬぐってくれた。

りんの身体は食料不足でアバラがうくほど痩せていたが、叔母が汚れを落とし新しい服を着せると、子供らしく可愛らしくなった。

新しい服は、りんの母親の晴れ着をほどこき、叔母が一晩で縫い上げてくれたもので、白地に赤の格子柄が、りんにも良く似合っている。りんの用意が整うと、りんの父親はもう一度しっかりとりんを抱き締めると、りんの首に赤い巾着袋を下げてくれた。

「りん。お母の形見の櫛だ。きつとお母はりんを迎えに来てくれるから大事に持っておくんだぞ。」

「おらはきつとお母のところに行っても追い出されちまうだろうからな。りんが持っていてやってくれ。あいつはりんに髪をすいてもらうのが好きだったから。」

父親はそこで言葉を切ると、ひどく悲しそうに笑った。

りんは、父親にそんな顔をしてほしくなくて、父親の腕に抱きついて、必死に言った。

「お父、りんがいつしよにお母にごめんっていう。お母はやさしいからゆるしてくれるよ。」

父親はりんの言葉に何も言えなくなって、またりんを抱き締めた。

「なんでりんが・・・。」

叔父夫婦やいとこたちも集まってきたが、りんの父親に何の言葉もかけられないようだった。

そこに、祖父が近づいてきて、声をかけた。



「もう時間だ・・・。」

りんの父親はのろのろと顔を上げ、祖父を暗い目で見つめ返すと、ゆっくりとりんを祖父の手に渡した。

・りんはもうすぐオヌママサマにたべられちゃうから、もう爺さまやお父たちにあえないんだ。

りんはそう思うと、悲しさと恐怖で、また体が震えてきた。

祖父は、そんなりんを見るにつけて可哀想で仕方なく「儀式はやめるべきじゃないか」と考えはじめていたが、りんを抱いて家の外に出たときに集落を見て、やはり儀式は必要だと痛感した。

この日も太陽は高く上り、集落や村の畑が荒廃した様子を余すところなく見えたため、りんをここで助けたとしてもいずれ全員が死んでしまうだろうことが簡単に想像できたのである。

・もうこうするしかないのだ・・・。

老人は心を決め、村の代表として年配の者を3名選ぶと、その日に山で仕留めたウサギを持たせて、りんを抱いたまま3人をつれて山へと続く道を歩き始めた。

老人たちが森に入りしばらく歩いたところで、よく道がならされて下りになっている道の脇に、木の杭に横板をわたしてふさがれている道が見えた。

老人以外の3人が横板をはずすと、一行は黙々と道を登り始めた。その道は、久しく人が通っていないようで、草木が生い茂り、なかなか進むことができなかつたが、それでも1時間ほど進むと、いき

なり森が途絶えて崖になつてゐる場所についた。りんは、恐怖のあまり半ば放心状態におちいつていたが、この崖を見たたん、不思議と言ひ伝えにあつた「子供が誤つて落ちた場所」がこの崖だと理解できた。

理屈ではなく、りんは

・このしたに、ナニかがいる  
と感じたのである。

崖につくと、老人は他の3人の村人に目配せをして少し離れさせると、抱いたままのりんの目をしっかりと見つめて話し始めた。

「りん、何を言つても言い訳にしかならんだろう。ただ、これだけは分かつてくれ。わしやおまえのお父はお前を本当に愛しておつたんじゃ・・もちろん集落のみんなもな。」

「だが、わしは村長じゃ、村を導かなくてはならん。わしにはりん以外の子は選べなかつた・・・。りん、本当にすまない・・・っ」

そして、祖父はそのまま静かに涙をこぼしたのである。

りんは、祖父の涙を見たのはこれが初めてだった。

・爺さまもかなしいんだ。お父もいつぱいきつそうだった。おつちやんもおばちゃんも兄やんも姉やんも・・・。

りんはそう思うと、なんだか悲しみが薄れて、怖かつた気持ちも少しなくなつたように感じた。

「爺さま・・。りんも爺さまたちがだいすきだよ。りんもがんばるからなかないで。」

りんがそう言うと、老人は目を軽く見開き、泣きながら笑うような変な顔をした。

そして表情を引き締めると、一言

「儀式を始める。」

と言った。

その言葉を聞いて、少し離れて立っていた村人たちが、崖に向かってウサギを投げ込んだ。

ウサギが崖の下に落ちたのを確認すると、老人はりんを抱いたまま崖のふちまで歩き、崖のふちからりんを抱いた両腕を差し出した。

りんは、老人の腕にしがみつきそうになるのをこらえて、目をギョツとつぶると、暗闇の中で老人のしゃがれた声が

「お沼さま、贅を差し上げます。そのかわり雨を降らせてください。」

というのを聞き、そして老人の手の感触を感じなくなっと思ったから、耳元で大きな動物のうなり声のようなものが聞こえた。

「オヌマサマだ!!」

りんがそう思ったと同時に、身体を何か生暖かいものが包み込み、りんはそのまま気を失った。

崖の上に残っていた老人は、その場に力なく座り込んでいた。

「りんを、崖下の沼から上がってきたナニかが飲み込んでいった。。。

あれがお沼さまか・・・?

老人には、沼から上がったきた黒い蛇のような影がりんを呑む込むと、すぐに沼に消えていったことしか分からなかった。

老人にとってもお沼さまに会ったのが初めてだったため、儀式が本当に終わったのかどうかわからなかったのである。

すると、老人の頬に何か冷たいものが落ちてきた。

老人が顔を上げると、空はいつの間にか黒い雲が覆っており、雨がパラパラと振り出しはじめていたのである。

「おお・・・っ、雨だ・・・！」

「これで村は救われた・・・！」

「村長早く村へ知らせましょう！」

久しぶりの雨に、儀式に参加した村人たちはうれしげに騒ぎ始めた。中には、今すぐ村に戻ろうと老人に声をかけた者もいたが、老人は自分の両手にあるはずのない重みを思い出し、長くそこから動くことはできなかった。

その後、その村にりんが戻ることはなかった。

## 儀式（後書き）

次はやつと相手役の登場！・・・といっても考え中です。（

## 洞窟（前書き）

なんだか地味に見てくれている人がいるみたいで、励みになります。

## 洞窟

・なんかぐるぐるする……。

りんは、ほのかに暖かい暗闇の中にいた。

自分が上を向いているのか、下を向いているのかさえわからない。目をあけてもそこには暗闇が広がっているだけだ。

・りん、もうしんじやつたのかな……。ここ、どこだろ？しんじやつたなら、お母がむかえにきてくれるといいな。

りんはなぜかその闇が怖くなく、逆に包まれていると安心できた。だんだんまぶたが重くなつてきて、自然とあくびが出る。

・あめふつたかな？爺さま、お父……。げんきだといいな……。

「ふあ〜。」

・お母、まだかな……。お母くるまでねててもいいよね……。

りんの意識はそのまま途切れた……。

りんにはわからなかったが、暗闇の中でりんの身体は押し流されていた。

流されている先にはだんだん小さな光が見えており、確実にりんはそちらへ流されていた。

金、朱、白、黒、黄・・・

乳白色の石には様々な色が入り混じっていて、光にあたるとキラキラと反射し、ひどく幻想的だった。

そこは洞窟の様で、壁といわず天井、床とすべてがその乳白色の石である。

この石が洞窟の入り口から差し込む日の光を受けて煌めいていた。

洞窟は人が何十人も入れるほど広かったが、奥行きはそれほどなく天井近くに幾つか小さな穴があいていて、そこから水がチヨロチヨロと流れ出していた。

入り口近くには一番大きな穴があいておりそこから白くにごった水が流れ出して、すぐ下の岩のくぼみにたまっている。

くぼみと入っても、長い間に水にしみこんだ成分が固まったのか、くぼみのふちが囲いのようになっており、ふちからはたえず水があふれ出した。

その天然の風呂桶といってもいいくぼみには、14、5歳くらいの裸の少年が一人入っており、自分の胸下ほどの深さの水に仰向けになつて身体をのぼし、水につかっていた。

少年は、ときたまくぼみのそこにたまつた白い泥を右腕にこすりつけるほかは目を閉じており、何かを考え込んでいる風にも見えた。

ドポドポドポツ！

「！」

急に、先ほどまでチヨロチヨロと流れ出ていた水が増え、少年のいるくぼみへと流れ込んできた。

少年が異変に気づき、すぐさま目を開けて水が流れ出る穴を見上げた。たたん、穴から白っぽい何かが落ちてきた。

ドスツ！！

「ぐっ！！」



勢いがついていたのか、その何かはまっすぐに少年に向かって落ちてきて、体制のととのっていなかった少年の腹の上に落下した。

「ごほっ、ごほっ・・・、何なんだ・・・」

腹を殴られたような衝撃を感じ、こらえきれずその咳き込むと、その何かを両手で掴み胸の前に持ち上げた。

「これは・・・」

少年は目を見張った。

それもそのはずで、少年が両手で掴みあげていたのは、まだ幼い少女だったのである。

一瞬その少女は死んでいるのかと思ったが、よく見ると呼吸をしており、ただ気絶をしているだけのようだった。

ただ、不思議なことにこのあたりでは見ないような白い肌をして、初めて見る変わった服を着ている。

「ん・・・」

少年がじっと見ていると、少女は小さくうめいてゆっくりと目をあけたが、その視線がふわふわと定まっではいなかった。

「#・・・○・・・」

少女は、少年が知らない言葉をつぶやくと、また目を閉じて、意識を失った。

- 怪我はない・・・。気を失っただけか。

少年は少女の状態を一瞥してそう判断を下すと、少女が出てきた穴に視線を移して様子をつかかったが、そこからはいつもと同じように水がチヨロチヨロと流れ出てくるだけで、変わった様子はなかった。

- この穴からは大人は無理だ。 洞窟の外にも誰かがいる気配はない。  
- では、この少女は・・・。

少年はそのまま水につかっているわけにも行かず、少女を洞窟の床に寝かせると、くぼみの近くにおいてあった荷物から服を取り出し、手早く着込んだ。

もちろん、十分に周囲の気配に気をくばっていたが、その心配は杞憂のようで、人が現れる気配はなかった。

少年は少女を見下ろしたが、少女は気を失ったままである。  
少年はひとつため息をついた。

- なんであろうと、このままにしておくことはできないか。 隊に連れ帰って、ジャニュエの支持を仰ぐ。

少年はぐったりした少女を左肩に担ぐと、荷物を持って洞窟の外へと歩き出した。

## 洞窟（後書き）

まだ少年は少年Aのままです。

話ができる前に、キャラクターはできていたのに……。

次こそは出しますよ！

## 月夜（前書き）

注意 りん以外の言葉は『』となっており、少年の世界の共通語であるドーラ語です。りんには「○」といった意味不明な言葉に聞こえていることを了承してお読みください。

## 月夜

パチッ

木がはぜる音が聞こえてきて、煙とともに食欲をそそる臭いがする。

- あったかい・・・。

りんは、幸せな夢を見ていた。

集落に日照りは起きていなくて、もちろんりんもお沼さまに食べられたりしない。

日が暮れる頃に、友達と別れて家に帰ると、家には爺さまとお父、そしてお母がいた。

お母は、泥に汚れたりりんを見ると、「あらまあ、」と笑いながら、手ぬぐいでりんの顔をぬぐってくれる。

そして、「さあ、ごはんですよ。手を洗ってきなさい。」と言って、りんの背中をポンツと叩いてくれた。

りんにとって一番幸せだった頃の思い出。

「お母。」

なんだか、お母が迎えにきてくれたような気がして、りんは目を覚ました。

でも、目の前には誰もおらず焚き火が燃えているだけで、りんが想像したようにお母はいなかった。

その焚き火の近くには、干し肉のようなものが刺さった細い棒が地面に刺してあって、おいしそうな臭いはそこから漂ってきていたようだった。

周りを見渡すと、焚き火の周り以外は木がうつそうと茂っていて、どうやら森の中の空き地に焚き火があり、りんはその近くで寝てい

たようだ。

りんは、自分がどうしてここにいるのか分からずにぼんやりしていたが、ふと、自分が生贄だったことを思い出した。

- りん、たべられたんだよね。しんだんじゃないの？

りんは黒い影に飲み込まれたことを思い出し、あわてて立ち上がると自分の手や足を確認したが、ちゃんとしている。頭やお腹も触ってみたが、どこもなくなっではいないようだ。

- しんでないなら、ここはどこ？おやまのどっかかな。

そこでふと、りんが空を見上げると、空はすでに暗くなっており無数の星が光っていて、すでに夜になっているようだった。

しかし、そこにりんの見たことのないものを見つけた。

りんがいつも見ていたように、柔らかな黄色ではあったが、月がきれいな丸ではなく歪な楕円形をしており、しかも途方もなく大きかった。

森の中からは、木に邪魔をされて、まるで月が森に埋まっているかのように見える。

そのとき、りんは自分がいる場所が集落近くの山ではないことに気づいた。

月から目を離して、周りの木を見ると、りんの住んでいる集落の近くの山では見たことのない木ばかりで、薄紫色の樹皮に白い葉がついていたり、枝の代わりに根っこのようなものが垂れ下がっているものまであった。

- ここどこ？むらは？

りんは、焚き火以外に明かりはないかとあたりを見渡したが、森の

中は暗く、少し焚き火から離れた場所は深い闇に覆われていた。

「爺さっ……。」

りんは我慢できなくなつて、祖父を呼ぼうとしたが、そこでそれが呼んではいけないことだということに気づいた。

「りんはイケニエだから。もうむらにもどっちゃいけないんだ。りんがもどつたら爺さまたちがこまる。」

そう考えると、目の前がさらに暗くなつたような気がして、りんはひぎをかかえて座り込んだ。

りんの目に自然と涙が浮かんできて、ぼろぼろとこぼれた。

「うっ……うえっ……うわぁぁんっ！」

お母との約束をやぶってしまうことはわかっていたが、りんの胸は悲しみで一杯になつていて、張り裂けてしまいそうだった。抱え込んだひぎが涙でどんどんぬれて行く。

「わぁぁぁっ、爺さ……ひっく……ま、お、お父おっ、おっ母ぁ……」

「もうあえない！爺さまたちにもうあえないんだっ！」

「うわぁぁぁんっ！」

りんがいつそう高く泣き声を上げたとき、りんの頭の上に何かのせられてゆっくりとなでてきた。

その何かは、りんの祖父がりんをなでる手つきにそっくりだったのだ。りんは一瞬祖父が迎えに来たのかと思ひ顔を上げた。

「爺さ・・・まつ？・・・あつ！」

そこにいた者を見て、りんは泣くどころか、瞬きすら忘れた。そこには、肩下までの長さの黒髪を金色の髪留めで一つに結んだ褐色の肌の少年が膝をついており、りんの頭を静かになでていたのである。

少年の年のころは14、5歳といったところで、まだ少年らしい線の細さが、その妙に無表情で繊細な顔をどこか作り物めいたものにしていた。

服装は二の腕までの袖のある丈の短いチュニツクに、少しゆつたりとした長ズボンをはいており、足には足首までを覆ったサンダルのようなものを履いていた。

りんは、少年ほど黒い肌を見たことがなかったが、それよりも、その少年の金色の目から目が離せなかった。

焚き火の明かりを反射して、少年の目はキラキラと光っているようにさえ見えた。

・きれい・・・。お母のくしのとりさんみたい。

そのとき、りんは父親からもらった母親の形見のクシを思い出した。そのクシは、りんの故郷の集落ではめつたにないほどの素晴らしい細工物で、漆に金の蒔絵が施されており、その蒔絵の図柄が飛び立つ鳥をかたどったものだったのである。

りんが着物の内側に手を入れると、首にかけられたひもの先には巾着袋がきちんとかかっついていて、その中に手を入れるとお母のクシが出てきた。

クシの鳥も焚き火の光でキラキラと輝いている。

・やっぱりおんなじだ。とりさんがりんのためにきてくれたのかな。



りんは自分がひとりぼっちじゃないと思うと、少しだけ勇気がわいてきて、目をこすって涙をふくと少年に話しかけた。

「とりさん、お母のクシからでてきたの？ここどこかしてる？」「りんね、もうムラにかえっちゃだめなの。とりさんいっしょにいてくれる？」

りんが必死で話しかけると、少年はそれまでりんの頭を静かになでていた手を止めると、お面のように無表情な顔をわずかに傾けた。

『お前・・・、ドーラ語を話せないのか？』

りんは少年の言葉がわからず、少年の真似をしてコテンと顔を傾けた。

「とりさんは、りんとことばがちがうの？爺さまが言ってたよ、おやまのむこうのずっととおくに、ことばがちがうところがあるって。とりさんもそうなのかな？どうしよう・・・。」

りんは言葉が通じないことに困って、じっと少年を見つめていると、少年は立ち上がって焚き火に近づいた。

そして、焚き火で焼いていた干し肉らしきものを一つ取ると、りんに差し出した。

りんは、少年の行動がどうやら「これを食べる」と言っているということが分かり、恐る恐る受け取ると、少年はうなずいて、自分も別の焼けた干し肉を食べ始めた。

クルルルルウ・・・

そのとき、思い出したようにりんのお腹が鳴って、りんは自分がひ

どく空腹だったことに気がついた。

干し肉からはおいしそうな臭いがしており、少年も平気な顔をして食べているので、りんもおずおずと干し肉をかじると、少し癖のある臭いがしたが、前に食べたことのある鹿肉のような味でおいしかった。

そのままりんが夢中で一つを食べ終わると、少年はまた干し肉を手渡してきたので、それも食べた。

りんのこぶし大くらいの干し肉を二つ食べ終わったところでお腹一杯になったので、その後少年が干し肉を差し出してきたときには、首を横にふると、少年は残りの干し肉は一人で食べてしまった。

そして少年は、腰に下げていた皮の袋を取り上げて、袋の端についた栓のようなものを取ると、そこから何かを飲むような仕草をして、りに差し出してきた。

・のめってことかな？

りんが袋の穴に口をつけて袋を傾けると、中から出てきたのは水で、りんが飲むと少年も少し飲んで、また腰に下げた。

そして、りんは気づかなかったが近くの木の根元には少年の荷物を入れた布袋が置かれており、少年はその袋から取り出した黒い小石のようなものを焚き火に投げ込むと、同じように袋から柔らかな布を取り出してりに渡した。

そして、座っているりんの前にかがみこんで、りに話しかけてきた。

『俺にはお前の言葉は分からない。だが俺の隊のジャニユエならなんとかしてくれるだろう……。それまでは我慢してくれ。今日はもう寝ろ。』

少年はりんの頭をなでると、りんから少し離れた場所に横になって、

りんは背を向けた。

やっぱり、りんには少年の言葉が理解できなかったし、少年の顔は無表情で何を考えているのかも分からなかったが、少年の目やりんの頭をなでる手はとても優しくかったので、少年がりんのことを思いやってくれていることがわかって嬉しかった。

・とりさんのりんをなでてくれるときはまるで爺さまみたいだ・  
。。

りんはそこで、少年に渡された布を見て、また横になっている少年を見た。

・とりさん、じぶんのふとんをかしてくれたのかな。とりさんがかぜをひいちゃう・・・そうだ！

りんは布を持って少年に近づくと、少年の身体に布をかぶせて、りんは少年の背中側から布にもぐりこむと、少年の背に自分の背をくっつけて横になった。

・これならとりさんも寒くない。  
「ふあ〜。」

りんは、少年にくっつけた背中からじんわりとぬくもりを感じてまた眠くなってきた。

目をつぶると、爺さまやお父たちが自然と浮かんできた。

・爺さま、とりさんがいてくれるからりん大丈夫だよ。爺さまたちにあえなくても、りんがんばるから・・・。

そこまで考えたときりんは眠りに落ちていった。

『何をするかと思えば……。』

りんが寝入ったのを確認すると、少年は自分にかけてられた布をめくって、自分の背中にくっついていているりんを見た。

『しょうがない……。』

少年はため息をつき、りんきちんと布をかけてやると、自分もまたりんのぬくもりを背中に感じながら浅い眠りについた。

## 月夜（後書き）

未だに少年Aです。

次こそは名前が出てくる！・・・はず。

## 森の中（前書き）

言葉が通じないため、りんも心の中でぐるぐるしていることが多いです。

## 森の中

・・・キュイ、キュイイイ・・・

「う・・・ん？」

「なんのこえ？とりかな？」

「お父・・・へんなこえがする・・・」

りんがまだ重いまぶたを開けて一緒に寝ているはずのお父を探すと、そこは森の中だった。

りんはびっくりした拍子に頭もはつきりしてきて、自分にかかっている布や目の前で消えかかっている焚き火を見て、昨日のことを思い出した。

「そうだ、オヌマサマにたべられて、とりさんのところにきたんだ。」「

そこで、りんはとりさんどこだろう？と辺りを見渡すと、ちょうど少年が藪のように密集している背の低い木の間から出てきたところだった。

少年は、柿くらいの大きさの黒っぽい木の実らしいものを5個持っていて、りんが起きているのに気づくと、りんに近づいてきた。

そして、りんにも木の実を2個渡すと、自分の分の木の実を地面に置き、りんにかかっていた布を折りたたみ始めた。

手渡された木の実は、触ってみると硬く、どんぐりのような殻があった。

りんは

「たべものかな？」

と思い、とりあえず殻を割れないかと木の実をぶつけ合ってみたが、カツン、カツンッ

と木の実は硬い音をたてるだけでとても割れそうにはなかった。

「これ、たべものじゃないの？」

りんはどうしていいのか分からず、少年を見上げると、ずっとりんの様子を見ていたのか少年が無言で手を出してきた。

そして木の実を受け取ると、へたの部分を指でつまんでねじり、そのままひっぱった。

すると、へたは簡単に取れて、硬い殻の中からみずみずしい白い果肉が出てきた。

少年はへたを取った後のからりをりに渡すと、「食べる」とでも言うように自分の口元を指差した。

「すまん。コルネオの実を知らないとは思わなかった。」

コルネオとは、少年の住むエイケといわれる大陸に広く分布する木で、硬い殻で覆われた実は生でも食べれるが、果肉を干して保存食にしたり、発酵させて酒を造ったりと様々に加工して食べられている。

また、その種からは油がとれ、花は染料の材料となり、木は丈夫な木材となることから、人々にひろく親しまれている木でもあった。

コルネオの実は、硬い殻に覆われているが、実の半分くらいを覆っているへたをひねるとすぐにへたが取れるため、小さな子供でも食べ方は知っていた。

そのため、少年はそのままりに木の実を渡してしまったのである。

「とりさん、ありがとう。」



りんは少年にお礼をいうと、さっそく白い果肉にかぶりついた。

「おいしー!」

白い果肉は、酸味がほとんどなくさっぱりとした甘さが口に広がってとても美味しかった。

りんが食べるのを確認して、少年も自分の木の実を食べはじめた。

食事が終わると、少年は焚き火の後始末をしてあつというまに荷物をまとめてしまった。

りんは何もすることができず、少年をただ見ているしかなかった。でも、りんは集落にいたころ、子供ながらに薬草を探したり、畑の草取りといった簡単な農作業を手伝ったりもしていたから、自分が何もできないのが悔しかった。

「りんもはやくとりさんのおてつだいでできるようになるう。」

「りんがおてつだいでできれば、とりさんはりんとずっといっしょにいてくれるかも。」

りんは密かにこころに決めると、少年の邪魔だけにはならないように少し離れたところから少年の動きを見ていた。

少年は荷物をまとめて背中に背負うと、りんの方を見て手招きした。りんがあわてて少年のところに行くのと、少年はりんの片手をしっかりと握ると、もう片方の手で森の中を指差した。

りんは今から森の中に行くということが分かって、少年に向かってうなずいた。

すると、少年は森を指していた手で、りんの頭をなでてくれた。

「とりさんになでられた。」

りんはなぜ少年がなでてくれたのかは分からなかったが、なでられたことが嬉しくてニコニコしていると、少年が歩き始めたので、一緒に歩き始めた。

しかし、森の中はりんにとって歩きやすいところではなかった。

りんの腰の高さまである段差や、倒木、生い茂る草木など、まだ小さなりんにはとても大変だった。

そのたびに少年がりんを抱えたり、先に草木を掻き分けてくれたりしたりしたが、とうとうりんがこけて両膝をすりむいてしまうと、りんを抱っこして下ろしてくれなくなった。

りんは両足が痛くてジンジンしたが、足場の悪い山道でりんを抱えている少年が心配で、

「とりさん、りんあるける。」

と何度も言ったが、りんの言葉が分からないせいなのか、りんを下ろしてはくれない。

それどころか、少年はりんを抱えてもなんら問題はないようで、汗一つかかずにりんを抱えて山道を走り始めた。

りんがあれほど苦労した道を少年は軽々と進んでいく。

「とりさん、りんがいたからはやくいけなかったのかな・・・。」

りんは、自分が少年の足を引っ張ってたことき気がついて落ち込んだ。

りんがショボンとして黙っていると、そんなりに気がついたのか、少年は走りながらりんの背中をポンポンとなだめるように叩いた。

少年の優しさに、りんは落ち込んでいた気持ちが浮上してくるのがわかった。

「はやく、りんもおっきくなつて、ひとりであるけるようになるう。」

顔を上げると、まっすぐに前を見ている少年の顔がすぐ近くに見える。

木々の間からこぼれてくる光に照らされて、強い意志のこもった金色の瞳が明るい黄色に見える。

少年の目線を追うと、少年の動きに揺れる視界の中に、まだまだ森がずっと続いているのが見えた。

りんはこれからどうなっていくのかという不安がこみ上げてきて、少年にぎゅっとしがみついた。

すると、少年はりんが落ちそうになっていると勘違いしたのか、しっかりと抱えなおしてくれた。

「とりさんがずっといいしょがいい。」

りんは不安だらけの中で、少年だけは信じられるような気がした。すると、だんだん周りに木が少なくなってきた。

『着いたぞ。』

少年の声にりんが顔を上げると、すでにりん達は森を抜けており、広い草地に出ていた。

すぐ近くには大きな幌つきの荷車が2台止まって、そのそばでは数人の男女が食事の準備をしたり、楽器を奏でたりと思いいにすごしていた。

りんは、少年以外の人間を初めて見たため、少年に抱っこされたまままでまじまじと人々を見た。

そのうち、食事の準備をしていた腰まで真っ赤な癖の強い赤い髪を伸ばした女性が、りん達に気がついたのか親しげに少年に声をかけた。

『あら、やっと帰ってきたのね。お帰りなさい、ライナス。あら？  
その子は？』

『洞窟で拾った。ジャニユエはどこだ？』  
『いつもの所よ。』

少年は女性の言葉にうなずくと、りんを抱えたまま、2台の荷馬車  
のうち小さめの荷馬車にむかった。

女性は、少年の素っ気無さには慣れているのか、軽きため息をつい  
て、

『後で説明してもらおうからね。』

と言うと食事の準備に戻った。

りんは少年と女性が知り合いであることは分かったが、言葉が分か  
らないため何をすればいいのかわからずきよるきよると辺りを見て、  
最後に少年が近づいた荷車を見た。

荷車は、しっかりとした幌がかかっていて、入り口のカーテンは閉  
じられているため中を見ることができない。

すると、りん達が来るのが分かったかのように、中から低くかす  
れた女性の声が聞こえてきた。

『中にお入り。』

その声に導かれるように、少年は荷車の中に足を踏み入れた。

## 森の中（後書き）

やっと、少年の名前が出てきました。  
そして仲間とも合流です。

## 隊（前書き）

りんの言葉はほとんどないので、りんの言葉を『、りん以外の言葉を「」に変えます。

たぶん、『はほとんどつかいません。

## 隊

幌にかかったカーテンを開くと、中には40代くらいの女性が一人クッションにもたれるようにして座っていた。

肩口でそろえられた黄土色の髪に縁取られた顔はかすかな皺が浮いていて、真っ赤な口紅を塗った口が特徴的だ。

瞳はこげ茶色で、見つめているとどこまでも吸い込まれそうな不思議な色をたたえている。

荷車の中にはじゅうたんが敷かれ、隅にある衣装籠以外に色とりどりのクッションが置かれていて、居心地の良い空間が造られている。ライナスはりんをじゅうたんの上に下ろすと、立ったまま女性に話しかけた。

「ジャニユエ。」

「待ちな、言われなくても分かるよ。この子のことだろう。どこで拾ったんだい？」

ジャニユエは少年の言葉をさえぎると、身体を起こして、不安げな様子でライナスの服のすそを掴んでいるりんを見た。

「・・・イス洞窟の穴から落ちてきた。」

ライナスの言葉を聞き、ジャニユエはりんからライナスに目を移してしばらく見つめると、目を閉じて重いため息をついた。

そして、自分の向かいにあるクッションを指差し、

「とにかくそこに座りな。それにその子はどろだらけじゃないかい。ちよつとおいで。」

といいながらりんを手招きする。

りんは、ジャニユエから手招きをされたので、うかがう様にライナ

スを見上げると、ライナスがうなずいたのでおずおずとジャニユエに近づいた。

すると、ジャニユエは腰に下げていた布を取り、りんの顔についた泥や、怪我をした膝の血をぬぐった。

ジャニユエはりんの膝をぬぐったときに一瞬動きを止めたが、すぐに何もなかったように作業を続けた。

ジャニユエの手つきは少し荒っぽかったが、最後に朝に故郷で叔母さんが自分を布でぬぐってくれたことを思い出して、りんは少し胸が締め付けられた。

「みんなげんきかな・・・。」

そのとき、りんは懐かしい集落のことを思い出して、また泣きそうになるのを我慢していたので、自分の足がすでに痛まなくなっていることには気がつかなかった。

りんが少しはきれいになったところで、ジャニユエはりんを自分の近くに座らせた。

りんは、ジャニユエに少しは慣れて

『ありがとう。』

とはにかんだようにして言うと、ジャニユエの近くに大人しく座った。

ジャニユエはりんが笑ったので、自分もにつこりと笑い返した。

「ふん、可愛い子じゃないか。ライナス、お前にはこの子が何なのか知ってるのかい？」

「・・・。」

ライナスが凍りついたように無表情な顔で見返していると、ジャニ



ユエは鼻で笑った。

「そんな顔で睨むんじゃないよ。別にからかつてるわけじゃない。一度は聞いたことがあるはずだよ。『救いの誓<sup>にえ</sup>』を。」

「！」

りんは短い付き合いではあったが、初めてライナスの表情が変わるのを見た。

それほどはつきりとした変化ではなかったが、確かに少年の目は見開かれ酷く驚いているようだった。

少年はそのままの表情でりんを見下ろし、りんの心配そうな目に気づき元の無表情に戻ると、何もなかったように女性に目を戻した。

しかし、その目はわずかに細められ、少年がまだ動揺していることがジャニュエにはよく分かった。

「説明してくれ。」

「説明するほどのことじゃないよ。古い伝説さ。」

そして、ジャニュエは歌うような言い回しで、一つの伝説を話し始めた。

・あるとき、聖なる洞窟より一人の少年現れた。

少年は不思議な力を持ち、怪我をしてもすぐに傷はなくなり、そしてその血にはあらゆるものを癒す力があつた。

心優しい少年は、その血をもって人々を救った。

しかし、それを知ったその国の王は、少年の力を独り占めしようと考え、少年を捕らえるように兵に命じた。

それを知った少年は恋人と手を取り合つて逃げた。

しかし、東の果てでとうとう兵に追い詰められ、少年とその恋人は崖から飛び降りたのだった。

兵たちが遺体をいくら捜しても見つかることはなく、しばらくすると崖の上には一本の木が生え、藍色の鳥が住み着くようになった。その木は、少年の肌と同じく幹が乳白色のだったことから少年の生まれ変わりと言われ、少年の恋人の少女の目の色と同じ鳥は、恋人の生まれ変わりと言われている。

「まあ、木や鳥は後から付け加えられた御伽噺だよ。だけど、すべてを癒す血をもった少年は本当にいたし、その少年が現れた洞窟がイース洞窟なんだよ。」

「ごらん、この子の膝の傷を。こびりついてた血の量を見ると、もう傷がなくなってるなんてことはあるはずないんだよ。それにこの肌。お前みたいに褐色でもなければ、私らみたい青白いわけでもない。この子は伝説の少年と同じ救いの贄だよ。」

ライナスがりんの膝を見ると、泥と血がぬぐわれた膝はつるりとしていて、ついさつきすりむいたとは思えなかった。

りんもライナスとジャニュエの視線を受けて、自分の膝を見るともう傷がなくなっていたのでびっくりした。

「あれ？けがしたのに、きずがない。」

りんは試しに足を投げ出して座ると、自分の膝をぺちぺちと叩いてみたが、やっぱり痛くない。

りんが頭の中で「??」を浮かべていると、ライナスはりんから目を上げてジャニュエを見た。

「どつすればいい。」

「・・・それはこの子を連れて行きたいってことかい？生半可な気持ちでこの子の力が引き寄せられるものからこの子を守ることなんかできないうよ。」

「・・・連れて行くとした。」

女性は軽くため息をついて言った。

「隊の規律その一、隊員が連れて行くとしたら、相手もそう望んだときには隊に入れる・・・か。ならこの子の面倒はお前が見な。私もできるかぎりは助けはしよう。」

「まずはこの子の言葉だね。これは悠長にまっちゃんられないよ。早くこの子には自分の力を理解させなくちゃならない。だから私の『時越え』を使う。これは譲れないからね。」

ライナスはしばらくしてから、しぶしぶという様にうなづいた。

すると、ジャニユエはじゅうたんに置かれていたランプを手に取り、その中に懐から出した粉を入れた。

ライナスはりん達からさらに離れて、二人の様子をじっと見ている。しばらくすると、幌の中に吸うとぼつつと意識が飛ぶような香りが広がってきた。

りんは、その香りをまともに吸ってしまい、なんだかふわふわとした気分になってきた。

「あれ、なんかふわふわする。とりさんやおばさんが3人ずつ・・・？」

ジャニユエは、りんの目がぼんやりと視点が定まらなくなったのを確認すると、右手でりんの目を覆い、左手でその額を覆った。

そして、目を閉じて集中すると、両手が淡く光始める。そしてその光はさらに広がり、りんの頭を包み込んだ。

「あああああああーっ！！！！」

りんの身体を突然激痛が襲う。

女性に覆われている目と額から、直接頭の中を障られているような不快感と痛みがこみ上げてくる。

「いたい！いたい！きもちわるい！お母！とりさん！！」

すると、あまりの痛みにりんの体が耐えられなくなったのか、りんの体から急に力が抜け、床に倒れて気を失った。

りんの遠い意識の中で、女性が、

「この子の体じゃ、ここまでしか耐えられないか……。だけど片言なら話せるはずさ。ライナス。これから熱が高くなるはずだから、ついでにあげな。」

と言っ言葉が聞こえてきた。

そのとき、初めてこの世界の言葉が理解できたのだが、りんの意識はそこで途切れた。

## 隊（後書き）

ジャーニーは勝手に話してくれるので楽です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3947/>

---

熱砂の国へ

2010年10月14日23時57分発行